

——宮 孝一氏追悼記——

宮 孝一先生を偲ぶ

兼 子 宙

本学会名誉会員、宮 孝一氏は昭和55年2月24日に、忽焉として不帰の客となられた。先生を知る多くの者にとってまことに哀惜の念に堪えないところである。謹んで哀悼の意を表する。

先生は明治40年新潟県に生れ、旧制新潟高校を経て昭和6年東京大学文学部心理学科に入学、6年春に卒業された。私とは同級生の仲である。「大学は出たけれど」の不況時代であったから、仕方なし研究室のまわりに居た者たちが木曜会という名の勉強会を作った。その仲間でもあった。また同級生の尾嶋碩心（のち東文理大教授）と3人協同で「学級内の友人関係の研究」という集団心理学のはしりのような研究を数年一緒にした。それ以上に若き日の深い友情をわけた君である。その頃からの通称「宮さん」であとは書かせて頂く。

宮さんは卒論では運動視の研究をされた。航空心理の広い実験室で、高木貫一先輩の作った何やら大きな装置をガラガラ運転している小柄な宮さんの姿が今も目に残っている。その後も「ミューラーライエル図形に於ける形態把握」（昭12）など知覚研究に業績を残しておられる。

若い日の宮さんは単なる勉強家でなく、鋭い批判精神をもった哲学者であり、また詩人でもあった。余りの鋭さ故に特高からにらまれて苦勞されたこともある。苦難の生活であった。そんな中でどのように宮さんは勉強をつづけられたのであろうか、昭和13年に岩波書店からW. ケーラー「類人猿の知恵試験」のあの堂々たる訳書を出され、われわれを驚嘆させたのである。

昭和10年に京城大学助手として渡鮮し、14年からは朝鮮総督府の職業技師として終戦まで勤務された。引揚げられて1年ほどは文部省教育研究所に、ついで新設の人事院に移って26年末までの4年間を人事院図書館長をなさった。少し遅れて私も人事院に入ったので、ここで思いもかけず宮さんと再び一緒になった。宮さんの昔と変なぬ飄々とした話をたびたび聞きに行って、終戦苦の中で私は心の糧となぐさめを求めているようである。最近になって後述の宮家集の中の敗戦余塵の詩を読んで、当時の宮さんの敗戦に傷ついた心境を更めて深く思ったので

ある。

昭和27年1月に金沢大学法文学部教授に転出された。この教師としての職と、古都金沢の人情風物は宮さんの心の傷をいやし、安住の地となったのではないかと私は思う。その後の金沢大学教授としての宮さんは元気に活動をつづけられた。ときには詩人としての沈鬱な時も持たれたではあろうが。毎年の学会などで顔を会せると釣の話、フロイドの話など、いつも楽しいひとときを共にしたものである。

応用心理学会のためにも昭和35年に第27同大会を金沢大学で盛大に開催された。その経費の赤字をだまって一人で何年も苦勞して処理した、などという話も聞いている。そのほか北陸心理学会会長をなさったり、石川県精神衛生学会には永年に亘って副会長として貢献してこられた。

昭和48年に金沢大学を定年退官（名誉教授）され、同年から金沢医科大学教授になられて内灘に移り住むことになる。金沢大学時代の宮さんは人間と動物の行動比較観察という独創的な考究を深く続けてゆく。また臨床心理学や精神分析学の方面にも広い関心を向けている。要するに深く人間を見つめ愛したのである。彼の含蓄のほとは法文学部論集にのせた「釣極意考」や「愛のなり立ち」などの作品に示されているが、甚だ残念なことにその纏った著作が見つからない。

晩年の46年に軽い脳卒中に倒れてしばらく静養を強いられたり、奥様を亡くされたり、ご不幸つづきで、どうなるかと気がかりであったが、私はなにも力になることができなかった。

内灘に住まわれてからまた元気になったようで、彼の家集のはしがきによると、「閑職に就いて内灘に移ってから急に作品が多くなったようである。老年になって、かえって感傷的になったらしい。……」晩年急に「宮孝一家集」巻一、巻二の二部を上梓されて贈って頂いた。各B5判150頁ほどのものである。

宮さんの天賦の詩才にあらためて感服すると同時に、彼がまた元気を回復して、このあとも続けて出されることを待望したのにそれも空しく亡なってしまわれた。ここに宮さんの人がらと心理学への貢献を偲びつつ謹んでご冥福を祈る。